

# 奥殿大給松平家出身・ 裏千家11代玄々斎の茶について

人間環境大学 学長補佐・教授

茶の湯文化学会副会長 神谷 昇司



皆さん、おはようございます。私、平成12年から人間環境大学におります。皆さんは人間環境大学ご存知ですか。知らない、大丈夫。大学の市民講座もあります。私は平成12年大学に改組（かいそ）の折まいりました。そして当時の竹市学長より、歴史文化環境の中で茶道文化を是非やって欲しいという話がありました。その時にはですね、まだ茶室もなかったんですけれども、学生会館を、ちょうど3教室分をぶっ通しにしまして茶室が出来ました。そこでは学生は茶道実習を学びながら茶道文化論を勉強することができます。勿論人間環境大学は、人間環境、精神環境そして歴史文化環境の3つの専攻がありますので、3専攻の内のひとつの専攻を学んで、あと2つを副専攻にして人間教育をしていくという大学です。最近では今日、こちらにもみえていますが、社会人の方も入っておられますので、皆さんご興味のある方、いろんな事にチャレンジしたい方は、是非、社会人入学をしてください。お待ちしております。

本当に今日は、暮れの押し迫った時に、大勢の方に来ていただきましてありがとうございます。今ご紹介がありましたが、私はお茶の家でずっときまして、それで平成12年に本大学に入ったと言いましたが、それまではですね、平成元年から、名古屋市新栄町にある名古屋文化短大というところに10年いました。その前はといいますと、今60歳なんですけど、名古屋大学の建築専攻の博士課程まで出ましたけれども、お茶を、一人でも多くの裏千家茶道人を増やしたいという思いもありまして、お茶の仕事の方にはずっと没頭してまいりました。それからたまたま平成元年から山田学園が名古屋女子文化短大になり、家政学科が生活文化学科に改められ、それで生活文化論の先生として、お茶と建築とまあ両方出来るからいいんじゃないのという事で、大学生活というか、教員生活になったわけです。それが40歳のときです。ですからまあ今ご紹介の時になにか色々肩書きがありましたが、まあ本当にお茶一本で来た人間です。その観点で裏千家十一代玄々斎についてお話していきたいと思っていますので、宜しくお願いします。

それで資料として、年表を提示しました。年表は、玄々斎の事を中心に書いた年表なんです。どの本にもこれだけ、網羅して細かくは書いてありませんので、もし玄々斎の事跡を参考にしたい方はこの年表を使ってみられるといいと思います。実は、年代の方に西暦は書いてあったんですけれども、たまたまこちらへ転送した時に、西暦の年号が入ってないんですね。お話していく中で、西暦年代を入れてもらえるといいと思います。

それでは、最初の宝暦10年というのは1760年。これは玄々斎の父の乗友が江戸で生まれるという記事でした。1760年、だからちょっと1番左の余白のところに1760と書いてもらえれば結構ですが、それから今日お話するのは、玄々斎と尾張12代の殿様、徳川斉荘（なりたか）公の話をいたします。この斉荘は徳川将軍11代の家斉（いえなり）の11番目の子なんです。それで最初は、御三卿の田安家に入りまして、田安から尾張徳川家62万石に移るわけです。その田安に養子に入った時の親が田安斉匡（なりまさ）という人なんです。この方が1779年・安永8年に生まれるという事で、3段目の田安斉匡のところに、1779年と書いてもらいたいと思います。それから1790年、寛政2年に乗友が致仕（ちし）とあります。要するに乗友というのは玄々斎の実父ですけれども、乗友が隠居をして、弟の乗尹（のりただ）に7代目を継がせます。乗友に男の子がいなくて、弟の乗尹が継ぐのですが、そののち男の子が、次々生まれてくるわけです。それで長兄の松平乗羨（のりよし）、この方が生まれるんです。それが1790年・寛政2年ですね。それから、玄々斎に1番影響を与えたお兄さん次男規綱（のりつな）・又日庵（ゆうじつあん）というんですね。この方が寛政4年・1792年です。もう一度いいますが1760年が宝暦10年。それから1779年が安永8年、それから1790年が寛政2年。寛政4年は1792年ですね。そして1802年、今度玄々斎の叔父の7代目を継いだ乗尹が隠居して長兄の乗羨が大給（おぎゅう）の松平8代を継ぐという事ですね、1802年。そしてその年に、又日庵・規綱はですね、渡辺半蔵綱光の養子と

なる。規綱が11歳の時に渡辺家に養子に入るんですね。渡辺家というのは、尾張の三家老・成瀬、竹腰、渡辺家という一家ですね。渡辺家は寺部、豊田市の寺部の領主ですね。1万4千石ある渡辺家に又日庵は養子に入るわけです。尾張の三家老の家柄ですから尾張徳川にとって非常に力があります。玄々斎が尾張の徳川家の茶道に入るといいうのもその影響が多分にあるわけです。

玄々斎がやっと出てきますね。1810年・文化7年に三河国奥殿（おくどの）領主大給（おぎゅう）の松平家の6代乗友の5男として誕生する。隣の欄に玄中の父蓬古（ほうこ）生まれると書いてあります。実は、私の家は、尾張徳川家の修験者、修験道の家柄の村瀬玄中が祖母の実父なんです。その玄中の父蓬古が生まれたのがこの年で、蓬古も裏千家のお茶をやっているのでそこに書いておきました。玄中は明日庵といって玄々斎の30歳年下ですが、民間の名古屋の裏千家茶道の草分けの方です。

それから玄々斎は裏千家に婿養子に入るわけですが、けれども。その奥様が同い年の認得斎の長女萬地（ま

ち）と言うんです。萬地は玄々斎と同年齢だったわけです。それから、その年はもうひとり今話した徳川斉荘。11代将軍家斉の11子として生まれると書いてありますが、実は斉荘も玄々斎と同じ年なんですね。そして1813年・文化10年に、斉荘（知止斎）は、4歳の時に田安斉匡の養子となるんですね。先程言いましたように将軍の子というのは、男の子は、大名家に養子にいきます。斉荘は御三卿の田安家にまづ入ったわけです。

そして、1819年・文政2年、10歳と書いてありますが、裏千家の10代認得斎の許に養子に入っています。その右の、文政2年のところ、文政2年というのは1819年ですね。そここのところに松平乗羨（宗安）が京都二条城の在番となると。そこで認得斎が二条城の中に詰めていた乗羨を訪ねた折、庭焼きを共にし、認得斎の水指を愛でた宗安が上薬を掛けたとあります。つまりですね、この時にはもうすでに認得斎と乗羨が昵懇の間柄であって、玄々斎を養子に入れる事の承諾があって、そしてお礼の意味もあってここへ挨拶に行ったんでしょうね。そこ

| 西暦   | 和 暦  | 年齢  | 月 日    | 玄々斎関係事項                                    | その他の事項                                                        |
|------|------|-----|--------|--------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| 1760 | 宝暦10 |     | 10月22日 |                                            | ・玄々斎の父乗友江戸で生まれる                                               |
| 1782 | 天明2  |     |        |                                            | ・乗友、大給松平六代を継ぐ                                                 |
| 1779 | 安永8  |     |        |                                            | ・田安斉匡生まれる                                                     |
| 1790 | 寛政2  |     |        |                                            | ・乗友致仕し、弟乗尹七代を継ぐ玄々斎の兄、松平乗羨生まれる                                 |
| 1792 | 寛政4  |     | 1月9日   |                                            | ・玄々斎の兄、規綱（又日葺）生まれる                                            |
| 1802 | 享和2  |     |        |                                            | ・玄々斎の叔父松平乗尹隠居し、松平乗羨大給松平八代を継ぐ<br>・規綱（又日葺）、渡辺半蔵綱光の養嫡子となる（規綱11歳） |
| 1804 | 文化1  |     |        |                                            | ・規綱（又日葺）渡辺家十代を継ぐ                                              |
| 1810 | 文化7  | 1歳  | 6月13日  | ・三河国奥殿領主大給松平家六代乗友の5男として誕生<br>・認得斎長女萬地誕生    | ・玄中の父蓬古生まれる                                                   |
| 1813 | 文化10 |     | 12月    |                                            | ・徳川斉荘（知止斎）十一代将軍家斉の第11子として生まれる<br>・斉荘（知止斎）、田安斉匡の養子となる（4歳）      |
| 1816 | 文化13 |     |        |                                            | ・松平乗羨、大坂加番となる                                                 |
| 1817 | 文化14 |     | 10月    |                                            | ・規綱（又日葺）、加判の職に就き、12月従五位下兵庫頭に任じらる                              |
| 1818 | 文政1  |     | 12月12日 |                                            | ・規綱（又日葺）、職を解かれ、名古屋に戻る（27歳）                                    |
| 1819 | 文政2  | 10歳 |        | ・裏千家十代認得斎の許に養子に入る                          | ・松平乗羨（宗安）京都二条城在番となる（認得斎庭焼水指に上薬を掛ける）                           |
| 1820 | 文政3  |     | 6月     |                                            | ・徳川斉荘（知止斎）元服し、斉荘となる                                           |
| 1824 | 文政7  |     |        |                                            | ・実父松平乗友没（65歳）                                                 |
| 1826 | 文政9  | 17歳 | 9月24日  | ・認得斎没（57歳）。十一代を継承                          | ・斉荘（知止斎）、斉匡の第7女猶姫と結婚                                          |
| 1827 | 文政10 | 18歳 | 8月23日  |                                            | ・松平乗羨没（38歳）                                                   |
|      |      |     |        | ・江戸へ出府、隅田川焼の香合「都鳥香合」を好みとする<br>・三友棗、大内山棗を好む |                                                               |

で共に庭焼きをして乗羨が認得斎の手造りの水指に上薬を掛けるということがあった。この水指が裏千家の蔵にあります。この水指が大給松平家と裏千家の出会いの証（あかし）になるものです。そして文政9年17歳の時、1826年ですが、認得斎が亡くなります。養子に入って7年間 認得斎の薫陶を受けただけです。この年認得斎の長女・萬地と結婚して婿養子という事になり、裏千家11代を継ぐわけです。

一方、齊莊（知止斎）も齊匡の第7女、猶姫（ゆかひめ）と結婚しています。それから玄々斎は18歳の時、1827年・文政10年に江戸へ出府します。田安齊匡は玄々斎のお弟子さんになってたんですね。田安家へこの時に行きまして、その帰りに隅田川焼の都鳥香合を好んでいます。これは数が結構あります。齊莊は齊匡の養子となっていますので、まあその時から玄々斎とは顔見知りだという事は言えますね。そして23歳の天保3年1830年に再び江戸に出府して、田安齊匡より拝領した蛤の香合を好んでいます。まあこういった好みものがあると、その箱書き、書

付によっていろんな事が判ってくるわけです。だから茶道具というのは、箱書きというのは非常に重要なんです。まあ箱書きは贋物の箱書きがあつては困りますけれども、こういった資料になるものが多分にあるという事も知っておくといいですね。

それから玄々斎の兄渡辺半蔵規綱（又日庵）ですが、名古屋の尾頭坂に渡辺家の下屋敷があつたんですね。そしてそこに茶室があるんです。その茶室は現在昭和美術館といって、名古屋市昭和区の檀溪通に移築されています。1階には捻駕籠の席という茶席が、2階には南山寿荘と名称のある広間があります。2階の南山寿荘には扇面透しの欄間があるんです。その扇面透しの欄間。私の家には柏蔭斎という座敷があつて、そこに玄々斎好みの欄間があります。わが家の欄間は玄々斎の好みと判っていますので、そういった意味から、玄々斎が規綱（又日庵）の下屋敷にある捻駕籠の席、南山寿荘を造るのに関与したという事は証明出来るわけです。渡辺又日庵の捻駕籠の席ですが、それが出来たのが天保3年、玄々斎が23歳。又日庵が41歳の時です。これには棟札

| 西暦   | 和 暦     | 年齢  | 月 日    | 玄々斎関係事項                                                                                      | その他の事項                             |
|------|---------|-----|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|
| 1832 | 天保3     | 23歳 |        | ・再び江戸に出府、田安齊匡より拝領した蛤で香合を好む<br>・渡辺規綱（又日菴）が名古屋尾頭橋の渡辺家下屋敷に茶室「捻籠席」を竣築し、玄々斎は合力する<br>・この頃『喫茶送迎記』成る | ・又日菴（41歳）棟札                        |
| 1833 | 天保4     | 24歳 | 5月2日   | ・長男秋英童子没する                                                                                   |                                    |
| 1835 | 天保6     | 26歳 |        |                                                                                              | ・規綱（又日菴）、隠居する                      |
| 1836 | 天保7     | 27歳 |        |                                                                                              | ・田安齊匡致仕                            |
|      |         |     | 8月     |                                                                                              | ・齊莊（知止斎）、養父の退隠によって家督を継承            |
| 1837 | 天保8     | 28歳 | 8月     |                                                                                              | ・齊莊（知止斎）、権中納言に任ぜられる                |
| 1838 | 天保9     | 29歳 | 9月     | ・利休御祖堂を再興、咄々斎、抛筌斎等の広間、勝手周り、梅糸庵の大増築。8月15日まで                                                   |                                    |
| 1839 | 天保10    | 30歳 | 3月20日  |                                                                                              | ・尾州家十一代齊温没。齊莊（知止斎）十二代を継ぐ           |
|      |         |     | 9月8日   | ・利休二百五十年忌茶事初回。翌2月27日まで88回                                                                    | ・積翠庵松村宗悦「乱荘」伝授                     |
|      |         |     | 12月21日 |                                                                                              | ・齊莊（知止斎）従二位大納言に任ぜられる               |
| 1840 | 天保11 庚子 | 31歳 | 2月28日  | ・利休居士二百五十年忌を営む、梅香合を好み、茶杓、茶碗などを作る                                                             | ・松村宗悦奥秘「真台子」伝授50歳                  |
|      |         |     | 2月～3月  |                                                                                              | ・齊莊（知止斎）名古屋に滞在する旦入作鯨香合50個          |
|      |         |     | 初秋～仲冬  | ・玄々斎、齊莊に江戸に招かれ、茶道伝授を行う                                                                       | ・小習拾六ヶ条（天保11年8月付）乱カサリ真台子（天保11年9月付） |
|      |         |     | 冬      | ・尾張藩下屋敷和田戸山、錦明山の楓の木で茶杓を作る 雲錦茶杓                                                               |                                    |
|      |         |     |        | ・松山侯より二百石を受ける                                                                                |                                    |
| 1841 | 天保12 辛丑 | 32歳 |        | ・春 志也知保古釜を好む（浄寿）                                                                             |                                    |
| 1843 | 天保14    | 34歳 | 6月15日  |                                                                                              | ・齊莊（知止斎）、名古屋に滞在する 翌2月25日まで 孤葬訪ねる   |
|      |         |     |        | ・常盤釜を好む<br>・『喫茶敲門瓦子』成る                                                                       |                                    |



がありまして二人の名前が出ております。玄々斎はここには合力したというふうに書いておきました。そしてこの頃『喫茶送迎記』というのを玄々斎は書いています。玄々斎はたぶん、『南方録』とか『不白筆記』とかね、いろんな茶書を読破しています。そして自分も色々と茶書を書いています。この『喫茶送迎記』これもですね、玄々斎が話したことを又日庵が書き留めたものです。

それから天保6年、1835年、玄々斎26歳の時に規綱(44歳)は隠居して兵庫入道、又日庵と名乗ります。玄々斎は幼い頃は渡辺家へ寄宿しており、はじめは18歳も年の違う規綱に茶の湯の手ほどきを受けていたのでしょう。玄々斎にはですね男の子も生まれますが、この時の男の子は亡くなります。そして天保7年、1836年ですが、この時に斉莊(知止斎)は養父の退隠によって家督を継承。とりあえずは田安家の殿様になるわけです、斉莊28歳の天保8年には権中納言に任ぜられます。天保8年は1837年ですね。そしてここも玄々斎の大事業ですが、天保9年これが1838年という年。玄々斎29歳ですね。

利休御祖堂を再興し、咄々斎、抛筌斎等の広間、勝手周り、梅糸庵の増築をいたします。梅糸庵というのはその時には玄々斎のお母さんが、お母さんというのは認得斎の奥さんですが住んでいたところですね。そしてそのお母さんが亡くなってからは息子の一如斎が住みます。それで8月15日まで仕事をしまして、一旦そこで打ち切って利休250年忌の為の事業を行うわけですね。千家はですね50年ごとに利休さんの御遠忌を行うわけですね。その為に玄々斎のときが250年忌、その前不見斎が200年忌を行っていますが、そういう時には改築したり、修繕をします。年忌までの間にまあ1年ぐらい前から追善のお茶事をするわけですね。お茶事をしてそれで最終に法要を迎えます。特に玄々斎の250年忌の折は裏千家の建物を増築しまして、今日の重要文化財となっている建物はこのときにほぼ出来上がっています。この時にお茶事は88回行っているという事が記録にあります。1839年・天保10年ですね。

天保10年3月20日はこの尾州家11代斉温(なりはる)が亡くなります。11代の斉温というのはどう

| 西暦   | 和 暦    | 年齢  | 月 日         | 玄々斎関係事項                                                     | その他の事項                                                            |
|------|--------|-----|-------------|-------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|
| 1943 | 天保14   | 34歳 | 11月         | ・長谷川宗意の古稀を祝って萬地と合筆「松画賛」と蛤香合を贈る                              |                                                                   |
| 1844 | 弘化1 甲辰 | 35歳 |             | ・認得斎の室、松室宗江没(67歳)<br>・金城中にて茶碗作る(祖母懐の土・黒茶碗も)                 | ・村瀬玄中生まれる(3月9日)                                                   |
| 1845 | 弘化2    | 36歳 | 5月11日       | ・萬地没(36歳) 玄華斎華山宗柏                                           |                                                                   |
|      |        |     | 7月5日        |                                                             | ・尾張大納言徳川斉莊(知止斎)没(36歳)                                             |
|      |        |     |             | ・仙叟百五十回忌、また仙叟画像十枚を写し、田安家、又日庵、村瀬蓬古、長井同玄斎などへ配る<br>・この年「歌藁」を好む | ・明治 8 (1875) 仙叟二百年忌<br>昭和 44 (1969) 仙叟270年忌<br>平成 8 (1996) 仙叟三百年忌 |
| 1846 | 弘化3 丙午 | 37歳 | 6月10日       | ・長男千代松(一如斎)誕生                                               |                                                                   |
|      |        |     | 7月5日        | ・知止斎一周忌                                                     |                                                                   |
| 1847 | 弘化4    | 38歳 |             | ・祥瑞写筒水指、宋胡録水指を好む                                            |                                                                   |
| 1848 | 嘉永1    | 39歳 | 3月          | ・田子浦香合を好む                                                   |                                                                   |
|      |        |     | 4月          | ・射和の竹川竹斎今日庵訪ねる(ななそひの日記) 5月唐物伝授                              |                                                                   |
|      |        |     | 5月          | ・源氏橐を好む。この年以降数回に亘って好む                                       |                                                                   |
|      |        |     |             |                                                             | ・田安斉匡没(70歳)                                                       |
| 1849 | 嘉永2    | 40歳 |             | ・兜門を建てる                                                     |                                                                   |
|      |        |     | 閏4月21日      | ・知恩院門跡、尊超法親王(華頂宮)に献茶                                        |                                                                   |
|      |        |     | 仲冬<br>11月6日 | ・知恩院門跡、尊超法親王に献茶。貝香合を用いる                                     |                                                                   |
|      |        |     |             | ・不見斎五十年忌認得斎二十五回忌を営み松壺々建水、雑木盆好む<br>・この年、大炉を切る                |                                                                   |
| 1850 | 嘉永3 庚戌 | 41歳 | 春           | ・一如斎の花活け初め、記念に三徳花入を好む                                       | ・一如斎(5歳)                                                          |
|      |        |     | 8月13日       | ・長女猶鹿子誕生、豊兆橐を好む                                             |                                                                   |
|      |        |     |             | ・この年、洗朱橐、松梅橐を好む<br>達如上人より木地好み橐拝領し、枳殻亭献茶にて使用(文久1)            |                                                                   |

いう人かという、やっぱり將軍家斉の19番目の子なんですね。最初に弟の齊温が尾張徳川家に入るんですね。そしてこの齊温が亡くなるものですから兄さんの齊莊が田安家からこちらの尾張の徳川家に入るわけです。61万9,500石、まあ62万石の殿様になるわけですね。だからちょうどですね、殿様になった時が利休250年忌。そして玄々斎は大修繕をして大増築して現在の裏千家の建物の大部分が出来上がっています。その時に偶然と言ってもいいんですけれども、尾張の殿様になった齊莊が玄々斎を尾張家の茶道に入れるという。そういう縁って凄いなと私は思います。そして12月21日には齊莊は従二位大納言に任ぜられます。この齊莊が、ずっと生きとればですね、尾張徳川家の茶道は裏千家ですずっといったかもしれません。それまでは有楽流なんですね。尾張徳川家は。それで玄々斎の時だけが裏千家茶道をするわけですね。しかしこの齊莊さんは弘化2年7月5日に36歳で亡くなります。また玄々斎の奥さん、萬地さん、玄華斎華山宗柏さんも同じ年の5月11日に亡くなるんです。この華山宗柏さんは非

常にお茶のできた方でご自身の箱書きしたものもかなりあります。それで玄々斎は認得斎の次女照を後妻とします。翌年の6月10日には、玄々斎37歳で長男の千代松、一如斎が誕生します。そして7月5日に知止斎の一周忌となっています。

尾張徳川家を継いだ齊莊は、わずか7年間尾張徳川家の殿様になるんですけども、その間にですね又日庵や玄々斎ほか色んな人が介在して沢山の染筆や好物、箱書付をしております。

今日庵関係は、1849年・嘉永2年という玄々斎40歳の時ですね、兜門を建てます。兜門はですね、最初に天保年間に大増築した時、まだ出来てないんです。そして嘉永2年になって兜門ができます。兜門というのは裏千家の代表的なものです。これは龍光院の兜門を模したと言われます。ちょうど正面から見ると寄棟の屋根ですけども、中に入ると鎗を突き立てるとちょっとこうもち上がりますよね。鎗返しとって言うんですね、ちょっと窪んでいるんですね。そこが兜の鍔のような感じがする。それで兜門というわけですね。私たちが今日庵に行く時に兜

| 西暦   | 和 暦    | 年齢  | 月 日    | 玄々斎関係事項                                                         | その他の事項                  |
|------|--------|-----|--------|-----------------------------------------------------------------|-------------------------|
| 1851 | 嘉永4    | 42歳 | 2月28日  | ・大綱宗彦を訪れ江戸下向の挨拶をする                                              |                         |
|      |        |     |        |                                                                 | ・この年尾張藩主慶勝、尾張茶道を有楽流にかえる |
| 1852 | 嘉永5    | 43歳 | 1月14日  | ・江戸より帰京する                                                       |                         |
|      |        |     |        | ・北野法灯950年祭 大綱80歳 渡唐天神像                                          |                         |
|      |        |     | 3月21日  | ・又妙斎誕生                                                          |                         |
|      |        |     | 夏      | ・常叟の百五十回忌に松ヶ根茶入を好む                                              | ・常叟300年忌 H15.5.14       |
| 1853 | 嘉永6 癸丑 | 44歳 | 2月28日  | ・一如斎の点茶初め、この記念に曙棗を好む                                            | ・一如斎(8歳)                |
|      |        |     | 10月    | ・竹川邸吉葛園書院壁に「月白風清」戯書 利休尺八花入写10個                                  |                         |
|      |        |     |        | ・松坂にて茶杓銘すみかまを削り、長井雅主に贈る<br>・伊勢神宮参詣の折見た丸懸盤を菓子器に好む<br>・この年、松之釜を好む |                         |
| 1854 | 嘉永7    | 45歳 | 春      | ・伊勢松坂に出張稽古のおり茶箱点前を案出                                            |                         |
|      |        |     | 秋      | ・一如斎。照とともに茶碗を作り、三遊と名づける                                         |                         |
| 1854 | 安政1    | 45歳 |        | ・常盤風炉・釜を好む                                                      |                         |
| 1855 | 安政2    | 46歳 |        | ・この頃一如斎に玄室を与える                                                  | ・一如斎(10歳)               |
|      |        |     | 2月     | ・徳大寺実堅、深津宗味に入門                                                  |                         |
|      |        |     | 3月9日   | ・玄室(一如斎)、深津宗味とともに徳大寺実堅を訪れる                                      |                         |
|      |        |     | 乙卯夏    | ・兎耳水指を好み津田玄兎に贈る                                                 |                         |
|      |        |     | 12月12日 | ・前内大臣徳大寺実堅の保真斎にて茶事に招かれ一如斎を同道                                    |                         |
|      |        |     |        | ・咄々斎を建てる 水屋看板稽古席 掟を書く                                           | ・棟札 棟梁木村清兵衛             |

門に行くという言い方もいたします。

嘉永2年知恩院宮の尊超法親王（華頂宮）に御献茶をしました時に、咄々斎の隣の6畳間に大炉という炉を切ります。大炉というのは、普通炉というのは一尺四寸四方ですが、一尺八寸四方ありますね。またスライドもお目にかけますが、玄々斎は増築をした時に利休さんの名前の部屋は抛筌斎、これは12畳の部屋です。それからいつもお家元がお稽古をみる場所、これは咄々斎と言いますね。これは8畳です。8畳の隣に6畳の部屋を造ります。6畳の部屋と8畳の部屋との敷居は外すことができ、8畳と6畳、14畳の大広間になるようになっています。そんなふうにして大人数の茶会の時には敷居を外して拡大して、障子をはさんだ入側の長廊下（畳）も取り込んだ大広間ができます。この長廊下の行き着くところは利休御祖堂です。その長廊下も一緒に含めて、それから反対側（勝手側）の畳廊下も含めて咄々斎を拡大した大空間に演出するわけです。私たちが初釜に呼ばれる時は、それだけ広げた状態でお家元、大宗匠から御濃茶をいただくわけです。大体



兜 門

40人ぐらい入りますかね。今は50人ぐらい入っています。そのぐらいを一席にするくらいの部屋になります。その6畳の炉をですね一尺八寸の大きな炉にしまして、逆勝手の炉を切ります。逆勝手というのはお点前する時に普通はお客さんを右側に見ますが、それを本勝手と言います。お客さんを左側に見る場合は逆勝手と言います。その逆勝手の炉中の火でもって、8畳の部屋を暖めようという工夫がされ

| 西暦   | 和 暦    | 年齢  | 月 日    | 玄々斎関係事項                                            | その他の事項                             |
|------|--------|-----|--------|----------------------------------------------------|------------------------------------|
| 1856 | 安政3 丙巳 | 47歳 | 3月19日  | ・宗旦二百年忌追善茶事、翌9月まで。<br>記念に唐物写松之本盆好む<br>安政4年宗旦二百年忌   | ・一如斎（安政4年12歳）薄茶担当<br>平成19年宗旦三百五十年忌 |
|      |        |     | 5月     | ・『法護普須磨』成る                                         |                                    |
| 1858 | 安政5    | 49歳 | 2月28日  | ・西尾宗温台天目伝授にあたり茶杓<br>銘鶴のはしを贈る                       |                                    |
|      |        |     | 春      | ・茶通箱を好む（出合棧）                                       |                                    |
| 1859 | 安政6    | 50歳 |        | ・九条尚忠から「精中」号を授けられる                                 |                                    |
| 1860 | 万延1庚申  | 51歳 |        | ・近衛忠熙筆懷紙「冬松」枳殻御殿より<br>拝領 少庵250回忌に使用                | ・大綱宗彦没（2月16日 89歳）                  |
|      |        |     | 4月     | ・点茶盤を考案する                                          |                                    |
|      |        |     |        | ・献茶の儀を旨とする口上書を内裏<br>へ提出<br>・『利休居士茶之湯口伝』の茶書を執筆する    |                                    |
| 1861 | 文久1    | 52歳 | 2月10日  | ・正月20日東本願寺門主巖如光勝上人入門 大門主・達如上人が来庵<br>2月26日枳殻亭内露庵で献茶 | ・万延2年2月19日に文久と改元                   |
|      |        |     | 4月     | ・茶杓銘嵩岳退齡を削り近衛家に献上する                                |                                    |
| 1862 | 文久2    | 53歳 | 青陽     | ・小津了朴に「何可一日無此君」贈る<br>（潤玄斎深津宗味が仲介）                  | ・一如斎没（8月11日 17歳）                   |
| 1863 | 文久3 癸亥 | 54歳 | 9月7日から | ・少庵二百五十年忌 独楽香合大小、<br>三嶋角水指を好む                      | ・少庵400年忌 H26                       |
|      |        |     |        | ・又日暮の末子、渡辺織衛（徹玄斎）<br>を養子として宗淳と名乗らせる                |                                    |
| 1864 | 元治1    | 55歳 | 春      | ・福槌熨斗押を好む                                          |                                    |
|      |        |     |        | ・北野臨時祭再興に際し茶碗を奉納し、<br>残土を以て老松香合を作る                 |                                    |
|      |        |     | 秋      | ・黄銅真形薄端花器を禁中より拝領                                   |                                    |
| 1865 | 慶応1    | 56歳 | 春      | ・菊花三ツ玉白金細工を禁中より拝領                                  |                                    |
|      |        |     | 6月     | ・禁裏献茶、記念に菊泉香合を好む                                   |                                    |
|      |        |     |        | ・この頃、宗淳は徹玄斎と改名                                     |                                    |
| 1866 | 慶応2    | 57歳 | 1月10日  | ・禁裏献茶                                              |                                    |
|      |        |     | 1月19日  | ・禁裏献茶拝領物披露の茶会                                      |                                    |
|      |        |     |        | ・和巾点を復興、披露                                         |                                    |

ています。もちろん逆勝手にしますと、ちょうど8畳の部屋からみて1番奥のところでお点前をする事になるので、そこでお稽古している方も咄々斎の床柱前で座ってみえるお家元からはよく見えます。

華頂宮をお招きした時、初めて大炉を切って侘びた演出で薄茶を一杯差し上げたという事が記録に載っています。そしてこの年にはですね、東本願寺の門主さんもお弟子さんに加わります。玄々斎は、大名出身の武士ですので、そういった公家さんもそれから大名家とも交流をひろめています。そして東本願寺門主、達如上人より、木地の藁を拝領しまして、のちの文久元年に、東本願寺の枳殻亭内の露庵で玄々斎は御献茶をします。

安政2年、この時46歳ですね。この頃一如斎に玄室を与えます。玄室という名前。裏千家は代々千宗室といいます。若い頃、また隠居したときには玄室を名乗ります。

利休さんは天正19年に自刃します。切腹しますね。その時に孫の元伯宗旦は14歳でした。そして14歳の元伯宗旦は、大徳寺の春屋和尚の許で喝食

(かつじき)〈修行中の坊主〉でした。宗旦の親である少庵は、京都の利休屋敷に住んでいました。しかしお家は断絶しますので、少庵は会津の蒲生氏郷の許に預けられます。しばらくすると秀吉が許すわけです。許した時に少庵と息子の宗旦とが一緒に少庵のいた京都の利休屋敷に住まうんです。秀吉は利休から没収した道具は宗旦さんに戻します。少庵はあとを宗旦に託してしばらくすると隠居します。その隠居したところは苔寺にある湘南亭です。そこに隠居しました。文久3年少庵250年忌の折、玄々斎は湘南亭前の楓の木でもって香合を作ったり、桜の木で茶杓を作っています。

元伯宗旦には、4人の子どもがおりました。長男次男は家を出ていました。後妻の宗見さんに2人の子がいて、表千家と裏千家になるわけですね。要するに宗旦が70歳になった時に、3男が立派になったというんで4男と一緒に裏に隠居します。宗旦が76歳になった時、4男仙叟に後を託してから裏千家が始まるわけです。だから、本家は表千家かもしれませんがね、3男江岑宗左ですね。でもその宗旦がこ

| 西暦   | 和 暦    | 年齢  | 月 日      | 玄々斎関係事項                               | その他の事項                        |
|------|--------|-----|----------|---------------------------------------|-------------------------------|
| 1867 | 慶応3    | 58歳 |          | ・相馬焼香合を好む                             | ・大政奉還                         |
| 1868 | 明治1    | 59歳 |          | ・『芳名記聞』成る                             | ・明治維新                         |
| 1869 | 明治2    | 60歳 | 2月       | ・禁裏献茶                                 |                               |
|      |        |     |          | ・利休280年忌 和全義天目茶碗                      |                               |
|      |        |     | 5月28日    | ・利休立像の賛                               | ・池田藩家老・伊木三猿斎、利休木像の頭部に体を作り開眼供養 |
|      |        |     | 9月18日    | ・一燈百年忌追善茶会 翌年まで                       |                               |
| 1870 | 明治3    | 61歳 | 庚午 春     | ・還暦にあたり茶碗、茶杓などを作る                     |                               |
| 1871 | 明治4    | 62歳 | 1月18日    |                                       | ・又日葬没(80歳)                    |
|      |        |     | 4月15日    | ・角倉家から養子、又妙斎を迎える<br>松山県知事と尾州家に隠居願いを提出 | ・又妙斎(20歳) 真精院猶鹿子(22歳)         |
|      |        |     | 9月       | ・六閑斎百五十年忌、認得斎五十年忌に際し、胴張藁を好む           |                               |
| 1872 | 明治5 壬申 | 63歳 | 3月10日    | ・京都博覧会に際し、立礼式の茶法を発表する。博覧会は6月3日まで開催    |                               |
|      |        |     | 5月21日    | ・円能斎誕生(駒吉)                            |                               |
|      |        |     | 7月       | ・『茶道の源意』を執筆し、知事に提出する                  |                               |
| 1873 | 明治6    | 64歳 |          | ・認得斎五十回忌・六閑斎百五十回忌追善茶会を催す              |                               |
| 1874 | 明治7    | 65歳 |          | ・町田可玄斎宗芳没(7月3日)                       |                               |
| 1875 | 明治8    | 66歳 | 10月      | ・又妙斎と共に金沢訪問、翌年1月20日まで                 |                               |
| 1876 | 明治9    | 67歳 | 3月17・18日 | ・第5回博覧会で茶会                            |                               |
| 1877 | 明治10   | 68歳 | 7月11日    | ・玄々斎宗室没                               | ・又妙斎(26歳) 駒吉(6歳)              |
| 1879 | 明治12   |     |          | ・照子没                                  |                               |
| 1917 | 大正6    |     |          | ・又妙斎没(12月8日 66歳)                      |                               |
| 1918 | 大正7    |     | 12月8日    | ・徹玄斎没(71歳)                            | ・村瀬玄中没(3月11日 74歳)             |
| 1924 | 大正13   |     | 8月5日     | ・円能斎宗室没(53歳)                          |                               |



ちらに移ったという事で、宗旦がいたところが1番の主のところと言えば裏千家が本家かもしれません。まあそういうふうにはですね、裏千家と表千家が出来ますね。それからしばらくしてから次男の一翁宗守は、最初は塗師(ぬし)をしてたんですね。塗師をしてたんだけど、利休の血脈として一家を立てます。その時隣に住んでいた中村宗哲さんに塗師を譲るわけです。今、宗哲さんのなつめって凄く高いでしょう。宗哲さんが隣なんですね。宗哲さんに塗師を譲って茶の家元として千家を打ち立てます。そこが武者小路町にあるんで、武者小路の千家さん。武者小路千家というわけですね。それぞれ表千家は宗左という名前を名乗り、裏千家は宗室ですね。それから武者小路千家は宗守「守る」という字ですね。というふうに三千家ができます。

裏千家の場合は、仙叟宗室が若い頃に玄室を名乗っています。15代家元の鵬雲斎宗匠は16代坐忘斎家元に代を譲ってから玄室大宗匠といいます。だから裏千家には玄室の名前は非常に重要な名前ですね。一如斎にもこの玄室を与えていますね。それで

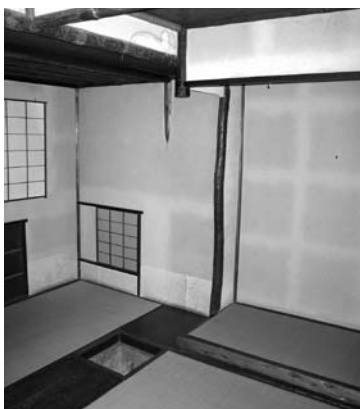
ですね、安政4年1857年に、宗旦の200年忌があります。その前年追善茶事が行われます。その時に一如斎は11歳だったんですね。一如斎が大きく忍ぶという字を書いて、玄々斎が宗旦の辞世の句を書いて、それを200幅書き下ろしています。それは今でも結構残っていますね。『虚空めが虚空にとうと生まれ来てまたくうくうとなる鐘の声』というのが宗旦さんの辞世の句なんですね。宗旦さんは70歳を過ぎてから毎年ですね辞世の句を書いているんですね。それを200幅この時に記念に書きます。一如斎はですね、このままいけば一如斎が12代になるんですけども、17歳で亡くなってしまうんですね。それで角倉家から又妙斎を養子に迎えます。この時にですね、安政3年というのは1856年ですが、5月のところに『法護普須磨』成ると書いてありますね。『法護普須磨』。今日の話の中では玄々斎は『法護普須磨』、これも玄々斎の仕事としては、重要な事跡です。この『法護普須磨』というのは、咄々斎と大炉間の6畳を隔てる襖が4本あります。その4本の襖の大炉6畳間の側に点前の内容がびっしりと



昭和美術館 南山寿荘



玄々斎好扇面透し欄間



昭和美術館 捻駕籠席



孤葦貴人口



孤葦床の間



書いてあります。当時の点前を全部網羅してあります。それから利休道歌、利休さんの唱えた百首の道歌、それも書いてありますね。そして点前は、それこそ今ですね、こんな点前があったかなというくらい当時のすべて点前が書いてありますね。つまり、玄々斎までは裏千家の点前というのはまだそれほど確立していなかったかもしれないですね。玄々斎は裏千家としての点前はこういうふうですよという事をはっきり活字にした、それが『法護普須磨』ですね。だから『法護普須磨』というのは紙を反古にする。要するにお茶というのは宗旦さんが、「茶の道は心に伝え目に伝え耳に伝えて一筆もなし」といってますが、お茶というのは以心伝心で伝えるものだからそんなに書くもんじゃないよと。10代の認得斎も、こまめに書いているところを父の不見斎に見咎められ、認得斎は全部燃やしちゃったそうです。しかし玄々斎はそのことはよく承知しててなお『法護普須磨』を書くわけです。その『法護普須磨』が書かれたのが、この1856年・安政3年5月ですね。これはですね、襖に書かれているだけじゃなくて、それが木版刷の冊子にもなっています。国会図書館にはその冊子本があります。ですから活字で見る事もできます。

玄々斎は50歳の時にですね、九条尚忠から「精中」の号をいただきます。これが安政6年・1859年ですね。玄々斎は、精中と言いますね。7月11日に亡くなっています。玄々斎の供養を精中忌と言います。

それからもうひとつ玄々斎の重要な事跡は、1860年・万延1年というところに51歳と書いてありますね。その下の欄の4月に、点茶盤を考案すると書いてあります。点茶盤という盤を使った立礼のお点前です。現在は座れない方も立礼だとまだお点前が出来ますね。そういうふうで、今や立礼点前はどんどん活用されています。その最初は玄々斎なんですね。特に玄々斎は点茶盤を座敷の中にしつらえます。

先程言った少庵、隠棲した少庵が苔寺に隠居しましたと言いましたが、この文久3年ですね、この年は文久3年、1863年という年です。この時に少庵の250年忌がきますね。独楽香合大小、虫明(むしあけ)窯の三嶋の角水指を好んでいますね。少庵は秀吉から拝領した唐物の独楽香合を持ってたんですね。それを玄々斎は湘南亭前の楓の木を使って大と小との2種類を、8代宗哲に作らせています。それから虫明窯ですが、これは岡山の池田藩家老伊木三猿斎が興した窯です。三猿斎も玄々斎の弟子ですね、三嶋というのは白釉を象嵌したものです。四角い形の水指です。大徳寺聚光院で毎月28日に行われる利休忌は2月28日は裏千家の担当月ですが、いつも虫明

の三嶋の水指を使っています。

それからもうひとつ重要なのは、元治1年・元治元年ですね。1864年秋とありますね、それから慶応元年・1865年です。春、56歳。そして6月のところですね、禁裏献茶、記念に菊泉香合を好むと。その前のところですね、文久2年のところを見ましょうか。文久2年に玄々斎53歳の時に一如斎が亡くなるんですね。8月11日に17歳で亡くなっています。玄々斎は7月11日に亡くなっています。11日というのは重要な日ですよ。一如斎が亡くなってから最初に又日庵の子どもを養子にとった事があるんです。その人がここにある1865年・慶応元年の春の次に6月があって、宗淳は徹玄斎と改名するとあります。徹玄斎、この人が一旦養子に入るんです。しかし、やはり修行が難しかったんでしょうか。それで三河へ帰ってしまって、この地でお茶を教えたんですね、この徹玄斎。だからこの地で結構徹玄斎の物が出てくる時もあります。

慶応1年・1865年、玄々斎56歳、禁裏献茶をしますね。玄々斎が天皇に献茶をする。これはどういうふうな意味があるかということ、玄々斎の出自は尾張の徳川家ですね。徳川家康の系統ですよ。この頃は勤皇佐幕で世の中が動乱の時期ですね。にもかかわらず、自由人として玄々斎はまず天皇が1番という事でしょね、天皇さんに献茶を申し込むわけです。中院家の仲介で申し込んだところ慶応元年に許されて、慶応元年と慶応2年1月10日、御献茶がされる。そしてその披露の茶会を1月19日に抛筌斎でいたしまして、そこで和巾点(わきんだて)という点前を復興します。これはどういう点前かということ、御献茶の時に残ったお茶を披露茶会でいただく時、内側に箔を塗った木地中次を使うんですね。それを、献残中次といいます。そして利休さんが茶器に古袱紗を敷いてお点前をした所作を復興させて和巾点という点前を考案するわけです。もちろん考案するというよりも利休さんの点前を復興したということです。玄々斎はいろんな書物を読んでいますので、利休さんの時の点前もしっかりと把握してたんでしょうね。そこで和巾点という点前を復興します。これも業績のひとつとして重要な事です。

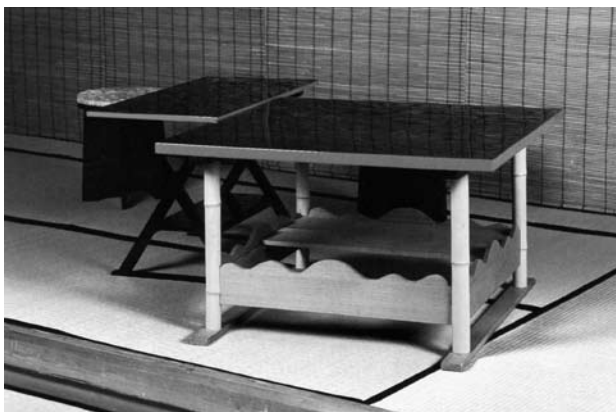
慶応3年1867年に大政奉還となり、1868年になると玄々斎59歳、明治維新ですね。維新になります。これから茶道は大変苦しい時代が続くわけです。というのはなぜかと言ったら明治政府になると、今まで大名から禄を貰えたのがなくなりますよね。だから別に千家だけではなくて、どの茶家も収入がなくなります。それでも明治2年には利休280年忌を行っております。そして明治4年1871年に、玄々斎

62歳の時、角倉家から養子として又妙斎を迎える。そして松山県庁、松山というのは、裏千家は仙叟宗室が流祖です。仙叟は加賀の前田家に仕えますね。5代常叟は加賀で生まれてますが、ちょっと体も弱い人だったので、四国松山の久松家に、茶道奉行として奉公できるようになるわけですね。それ以来久松家のところで茶道師範をしていたんです。ですから松山県知事と尾張徳川家にも隠居願いを玄々斎は提出して12代又妙斎が家元となります。この時に又妙斎は20歳、その奥さんの真精院猶鹿子さんは22歳という年です。だから20歳から養子に入るんですからなかなか厳しいですよ。それからお茶の修行をするというのですね。そして玄々斎が63歳の明治5年には円能斎、第13代の円能斎が生まれます。

そして明治5年の年に、芸事は全て鑑札をもつようにという通達が出されます。玄々斎はお茶というのは芸事のようなそんなもんじゃありませんよという事で、三千家を代表して『茶道の源意』を執筆して当時の京都知事に提出します。これもこの玄々斎の事業として非常に重要な意義深い事ですよ。そして『茶道の源意』を提出して、それが認められて、お茶は鑑札制度はいりませんよとなるわけですね。つまりお茶というのは、仁義礼智信の儒教精神に則って行われるものだから、そんな遊芸なものじゃないですよという事をはっきりと明言します。

それからもうひとつ明治5年に、京都博覧会が開催されます。先程万延元年点茶盤が考案されたと言いましたね。しかし玄々斎はそれを使ってはいないんですね。それを使う機会というのはこの明治5年、博覧会は6月3日まで開催。この時に点茶盤を使っています。そしてもう1回玄々斎はですね、67歳の明治9年・1876年に第5回博覧会で茶会をしています。最初の第1回の時は点茶盤を使って外人さんにお茶の紹介をしたのですが、第5回の時にはもう普通の濃茶、薄茶の点前でおこなっています。

玄々斎が亡くなるのは明治10年7月11日。です



点茶盤

から7月11日が毎年精中忌という事になります。その時は又妙斎が26歳。そして駒吉・円能斎が6歳という事ですね。

来年は、玄々斎の生誕200年という事です。10月3日に玄々斎顕彰茶会が岡崎で行われるという事です。そして9月11日から11月7日まで、玄々斎展が岡崎市の美術博物館で行われます。だからまあきつとこの頃になるとですね、玄々斎の講演が岡崎の地であると思いますので、まあその前座と思って今日のお話を聞いていただければありがたいと思います。私が、この時期にこうやってお話できた事も有り難いと思っています。というのは私は先程話したように玄々斎が好んだ孤菴という席があります。それは先程から言っている斉荘ですね、尾張の殿様・斉荘のために玄々斎が数寄屋坊主のご同朋(どうぼう)・日比野林阿弥(知玄斎)の家に造られて、それを明治44年に私の家へ移築したんですね。その孤菴という席と先ほど又日庵の南山寿荘に扇面透しの欄間があると言いましたが、その同じ欄間がある柏蔭斎という座敷があります。レジュメには記載しておきましたので参考にしてください。

まず徳川斉荘と玄々斎というレジュメがありますよね。出自の次はそうになっていませんか。はい、ここですね。まず斉荘の事を話しますと、尾張徳川家斉温ですね、レジュメの2枚目です。2枚目のところに徳川斉荘と玄々斎とありますよね。そこにちょっと読みますと、尾張徳川家11代斉温ですね。先程言いました11代將軍家斉の第19番目の子で、文政10年・1827年8月に襲封。要するに尾張の殿様になるんですが、天保10年3月20日江戸市ヶ谷の藩邸で21歳で逝去します。12代となった斉荘は家斉の11番目の子で、文化7年6月13日生まれ。4歳で御三卿の田安家の3代斉匡の養子となり文政9年2月、17歳で養父斉匡の7女猶姫と結婚。天保7年8月、十万石の家督を譲られ、翌年権中納言となり田安中納言と称します。斉温の逝去で、斉荘は天保10年3月尾張徳川家61万9,500石の藩主となります。斉荘は号はですね、知止斎。金城山人とも号します。最初のお国入りは天保11年2月4日から3月15日にかけての40日間です。ちょうど天保10年、利休250年忌、その頃です。まさにその時ですね。この時に金の鯨を見てですね、非常に感激するわけですね。それで楽旦入に鯨香合を50個造らせて、そのひとつにこう書いてあるんですね。

はじめての旅に鶴のおりたつを見て、この頃鶴は結構飛んどったんですね。『のどけしな けふを旅路のはじめにて 千とせの鶴に すはやちぎらむ』それから名古屋の城にいたりて、名古屋に着きまし





鯨香合

た。『かけ光るこがねの城は わが国に ありとき  
きしも けふ見初めつる』初めて見たよという事で  
すね。それから東に帰りて、もう江戸へ行くわけ  
すね。見れば 桜の花もさかりすぎたりとね『ふる  
さとの東に帰り来て見れば はなは尾張に思いま  
されり』だから尾張でも桜見たけれども、やっぱり江  
戸の桜がいいよというわけですね。それから『旅を  
せずば旅の思いをいかでしらん』『すがのねのなが  
き旅路のたのしさも 浮きも習いと 今ぞしりぬ  
る』というふうにかかれた香合があるわけです。こ  
れでもって斉荘の気持ちというのはよく判りますよ  
ね。斉温は、尾張に1度も入ってないですね。斉荘  
は2回お国入りしています。1度目がこの40日間。  
2回目に尾張にお国入りしたのは天保14年6月25日  
から8ヶ月。この8ヶ月間、この時には多くの茶道  
具を好んでいます。渡辺又日庵と尾張家同朋で数寄  
屋組頭であった日比野林阿弥〈知玄斎〉が大いに力  
を発揮していると思います。この方が孤菴主です。  
玄々斎の好みの茶席を家に造って、そして斉荘がそ  
こに呼ばれに行ったわけですね。たぶんこの8ヶ月  
の間に来喫されたと思うわけです。そして明治44  
年に神谷柏露軒に移築されたのはこの孤菴です。

次に裏千家の茶室をスライドで説明します。これ  
玄関ですね。そして兜門。このモノ黒は昭和24年



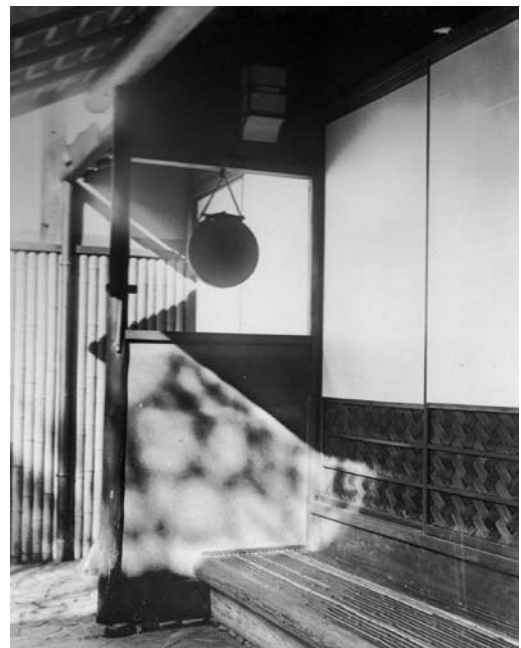
玄関先までの露地

に撮影されています。今こんなに木は茂っていま  
せんけれども、これ玄関ですね。これが無色軒から腰  
掛待合を見た写真ですね。無色軒という部屋は裏千  
家にとっては応接間になるところですね。いつもそ  
こには釜が掛かっています。その障子を開けると  
腰掛待合があります。腰掛待合、見ましたように石  
が置いてあります。石置きの屋根。これは仙叟が加



腰掛待合

賀へ奉公に行く道中の石置きの風情のある屋根、簡  
素な建物を見て腰掛待合を造るわけです。お茶事  
の時はこの無色軒から出て腰掛待合に行くわけです。  
ここが竹簀子(すのこ)になっていますよね、簀子。  
本来だどこが正客の座ですけども正客の座が竹  
簀子になるというのは、ちょっと普通では異例なん  
ですが、なぜかというこの隣に便所があります。  
便所があるからここは竹簀子にして草のしつらえと  
なります。竹簀子の場が正客の位置です。それは例  
外的な茶室の腰掛待合の造りです。こちらが玄関で



玄関



すね。玄関入ってお茶事の時だったらこの版木を叩くと何人きましたという事で判るわけです。もちろんその時に、こんにちはと言っても誰も出てきませんね、お茶事の時は。これを叩く事によって水屋の人達は、ああ見えたなという事が判るわけですね。そして今の腰掛待合から歩いて行くと、ここに竹門があります。これも玄々斎の好みです。竹を割って上と下を入れ子にしたものが竹門です。この畳石、霰こぼしの延べ段と向う側は飛石になっています



四方仏

ね。これが四方仏、手水鉢ですね。ちょっと話題になったのは、土岐の織部の里公園にですね、松坂屋主人伊藤次郎左衛門の陽輝荘にあった暮雪庵が移築されました。あそこは織部の里だから本来は織部好みの茶室を造るところですが、縁があって暮雪庵を移築したのですね。四方仏蹲踞も一緒に持ってきたのですが、後から伊藤さん宅から、利休さんの遺愛の四方仏だという掛け軸が寄贈されたのです。館ではこの四方仏をピカピカに磨いちゃって美術館の中に展示してありました。石というのは、やっぱり露地に据えなくては味わいなくなります。四方仏というのは層塔や宝篋印塔（ほうきょういんとう）の灯身にある四方仏に水鉢用に穴を開けた手水鉢です。裏千家の蹲踞として有名なものは、寒雲亭の前にある小袖の手水鉢です。これは秀吉から、利休さんが小袖を貰えるとなった時に、いや小袖よりはこの手水鉢がいいですと言って拝領したものという逸話がありますね、小袖の手水鉢。また形が利休好みの小袖形という説もあります。それからこの灯籠の笠が少し欠けていますね。宗旦はですね、きちんとした物よりは少し欠けた方が宜しいと言って欠けら

せたという灯籠ですね。

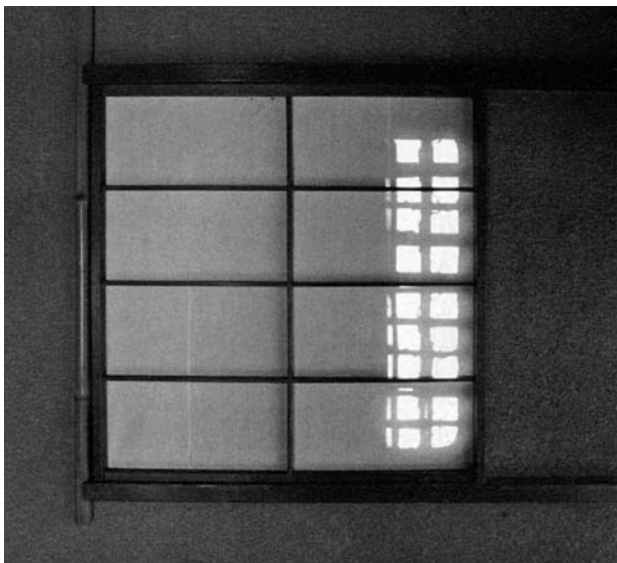
ここが今日庵があるところですね。ここは寒雲亭です。このところに塵穴がありますね。塵穴は四角い塵穴というのは広間の塵穴ですね。丸い塵穴は小間用です。露地の有名な話はですね、利休さんの若い頃は与四郎と言いました。紹鷗の門を叩きますね。紹鷗にお茶事に呼ばれた時に、掃き清められた露地に立たせて箒を持たせて掃除しろというわけですね。しばらく考えて与四郎はどうしたかといったら、木をちょっとゆすってですね、落ち葉がはらはらと落ちた風情を演出しました。お茶というのは時間的な経過が重要だよという事です。だからお茶事で客を招く時は11時のお招きであれば、もう8時くらいに綺麗に掃除したらもうそのままにしておけばいいと。但し、この塵穴ですね、茶席に入る前に心の塵を捨てなさいという意図があります。塵穴というのは庭のゴミ捨てや落ち葉を捨てるところじゃありませんよね。心の塵をぬぐい払って清らかな心持ちで席に入りましょうと。寒雲亭は広間ですから、広間は四角い塵穴。塵穴には硯石というものがあります。はい、これが今日庵ですね。今日庵という茶室。今日庵は裏千家の代名詞ですね。先程兜門が裏千家で重要な門と言いましたが、茶席としては今日庵ですね。これは宗旦が、この茶室が出来た時に清巖和尚、自分の参禅の師である清巖和尚を招こうと思ったのですね。たまたま清巖和尚が、宗旦のいない時にきたわけです。そして清巖和尚はまだ壁紙を貼っていない状態になっているその壁にですね、『懈怠比丘不期明日』〈けたいのびくみょうにちをごせず〉怠け者の坊主に明日はないから今日きましたよと書いたと言うわけです。宗旦さんはびっくりして申し訳なかったというんで、『邂逅比丘不期明日』『邂逅』（かいこう）とは、巡り会いというのは明日はないのに申し訳なかったと。「懈怠比丘」怠け者の坊主に「比丘」というのは坊主ですね。明日はないという言葉と「邂逅」の巡り会いには明日はないという、2つの掛け物は今裏千家にありまして、鵬雲斎大宗匠が77歳喜寿の時に、この両軸の写真が淡交の記事にありました。明日はない、今日だという事で今日庵という名前が生まれたわけです。もうひとつの説は利休さんの茶室に不審庵という茶室がありますが、『不審花開く今日春』という、これは利休さんの尊敬する古溪和尚の漢詩です。不審の花が開いて今日の春があるという事で今日庵の名前が出たとも言われます。裏千家では今日庵の説明には大抵清巖和尚の話がでますね。2畳の空間に向板を入れて一畳台目向切り炉、床はありません。壁床ですね。

裏千家の露地は、飛び石が低く打ってあります。



今日庵

入り口の前の躰上りの石のみが高く据えてあります。ここは下地窓ですね。風炉先窓です。躰口の上は連子窓があります。茶室は、壁構造ですね、いわゆる。そして窓をいかに開けるか。そしていかに道具を粗相に見せなくするかという事が重要なんです。ここが連子窓でここが風炉先窓。点前座脇の上に窓があります。これは七三の窓と言って、この洞庫の天井が、ここまであるんです。光が入ると7:3に障子の蔭ができます。下地窓からの光というのはこういう陰影効果があります。それから反古張と言ってですね、使い古された紙なんかをですね、こ



七：三の窓

う貼る事によって、反古張と言いますね。腰張りをこういった白い紙じゃなくて、使い古しの手紙までも貼るというね、そのくらいに粗相な風に見せているというのが今日庵です。躰口から入りますとここに壁があります。ここに中柱があります。辛夷(こぶし)の木で、ここに花生を掛ける花釘があります。それから床の間がありませんので、花を置く場合にはこの向板に置きます。こんな感じですね。ここが洞庫、内部は簀子になっていてここで水が捨てれます。1畳と台目畳、向板という席が今日庵ですね。究極の狭い空間ですね。亭主と客が1対1で、これ以上ですね主客の間で極度に緊張感を感じさせる茶室はないという空間ですね。これは後座の時、要するに懷石が終わって、濃茶を飲む時には掛け軸ははずして壁にですね、こうして花生を壁の真ん中に掛ける。これは利休さんの考案です。そしてここに花生を生けるという事は、壁に水を打つわけですから、貼付け壁の書院座敷の建物ではこういう事は出来ません。水を壁紙に掛ける事になります。ですから土壁の民家の材料を採用し、そして下地窓というのは民家の壁を塗り残した窓です。その下地窓を洗練させた窓が茶室の下地窓ですね。はい、これもそうですね。中柱の立つ仕切り壁が茶室に緊張感をもたせます。ここに桁があります。桁がそのまま見えるよりはここに壁があって、亭主との場所を区画する、仕切ることで茶室に緊張感が生まれます。はい、これは七三の窓という窓ですね。そこが洞庫です。洞庫を開けると下は竹簀子になっていて一重の棚があります。ちいさい部屋には大きな水屋洞庫が造ってありますね。

これ先程の竹門です。それから又隠(ゆういん)です。宗旦は70歳になって4男の仙叟を連れて裏(北側)に隠居して今日庵を造ります。それから76歳になってこの又隠を造ります。又隠れるという意味ですね、この茶室に籠もって仙叟にしっかり跡を任せましたよという、そういう意味で又隠という茶室が出来たと思います。宗旦時代にはこの又隠と今日庵ともうひとつ書院の寒雲亭という、この3つの席がありました。玄々斎は利休250年忌に際して大增築して整備しました。

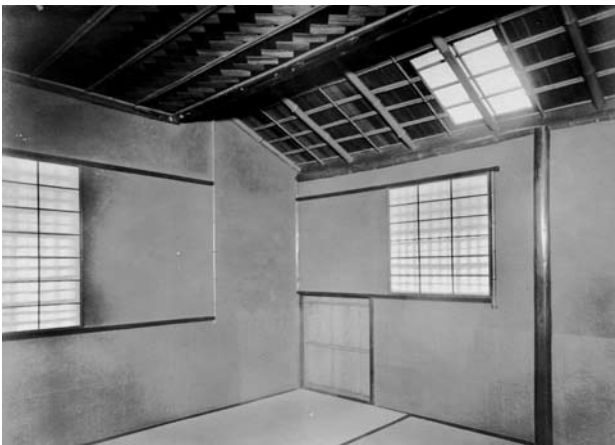
又隠前の露地は「豆撒き石」と言って、ここはですね無造作に石が置いてありますね。宗旦さんは躰口から、豆を撒いたように打ってあります。というのは、交通の用路ですね、こちらから黒文字の垣根を通って利休堂の方へ行く。こちらにはですね寒雲亭がある。それから又隠の方にもつながります。奥待合にも行く。なかなか露地の飛び石が打てない。それで無造作に豆を撒いたように打ったという工夫



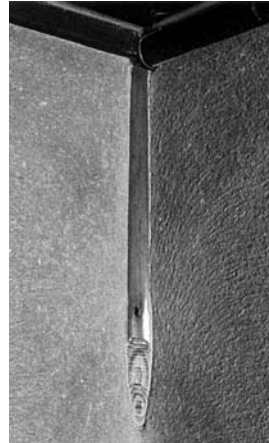


又隠前の豆撒石

が豆撒き石のいわれです。はい、これが又隠の床の間ですね。又隠は、窓が客座に下地窓がひとつと躡口上に下地窓がひとつ、そして突き上げ窓がひとつ、3つしかありません。それから宗旦時代は床柱に花釘を打ったんですが、仙叟は相手柱に花釘を打ちました。相手柱に花釘を打って、亭主から見やすくしました。又隠にも洞庫があります。家元が70歳を過ぎるとこの洞庫を使うと聞いております。70歳前までは板を被せて洞庫は使いません。それからここは、楊子柱と言って、ここに花生を掛ける事になります。お正月なんかでしたらこの釘に青竹を掛けて結び柳を飾る事ができます。天井も極度に低くて



又隠内部



楊子柱

茶道口の方立口が天井ギリギリ一杯ですね。窓はこの突き上げ窓と、ふたつの下地窓しかありません。客の入り口は躡口しかありません。宗旦さんは修道する場所としてこの茶室を造りました。先ほどの楊子柱は筆柱とも言いますね。これは、天正15年に北野大茶湯の時に利休さんが、上3分の2まで柱が見える曲がった柱を使ったのが最初なんです

ね。又隠の楊子柱は、削り木にしてありますね。30センチほど柱をみせて先を削ってそして花釘を打っています。点前座の向うの隅壁を柱を見せないで塗り回しの壁にするとですね、隅を土壁で丸くすることによって、奥行きを感じることができます。そういう工夫が又隠には施されていますね。又隠の水屋。ここが又隠の茶道口、洞庫。銅鑼が掛けてありますね。ここに仕付棚、炮烙棚という棚があります。ここは露地へ出るところ。水張口といいます。そしてこちらが今日庵の茶道口です。水屋はこのくらい広いと楽に動きができます。はい、炮烙棚。炮烙を炭手前の灰器を置くという意味で炮烙棚。

それから宗旦手植えの大銀杏の近くに奥待合があります。この奥待合は、9代不見斎が利休200年忌を行うんですね。ですが、その前年に火事があります。天明の大火といって、京都は下(しも)からずっと上(かみ)まで類焼します。3日間燃えたということで裏千家は道具を大徳寺まで運び、利休様の像だけは、当時裏千家には池があったので池の中に入れたということです。不見斎は利休像を仮に安置したのがこの奥待合です。利休さんの目線と位置に下地窓があげられています。雪見窓といいます。玄々



水屋





奥待合



砂雪隠



菊花石



小袖の手水鉢

斎によって利休堂が出来てからは奥待合として、いわゆる内腰掛待合になります。これが全体ですね。こんな感じで掛け物を掛けて待合になるわけですね。はい、隣の建物は砂雪隠です。砂雪隠というのはこういうものです。雪隠というのは雪に隠れると書きますね。これは何かと言うとトイレですね。禅宗では、このトイレの事を雪隠という言い方をしますね。そして、禅宗の寺院は、東司とか西浄といって、トイレとか浴場を非常に重要視します。お茶も、やはり清められた雪隠を見ることによって心を掃き清めるという意味合いがあります。だから雪隠に塵穴があれば塵箒を添えて青葉を置いておく。かならず亭主の心入れを見るようにします。

はい、これが又隠の外観ですね。こんな感じで藁葺きの草庵茶室ですね。ここが長廊下ですね、この行き先、ここが利休御祖堂です。梅の井の井戸がある中庭には菊花石の手水鉢があります。これは徳川齊荘公が玄々斎に贈った石で、大垣で取れると聞きますが、これほど大きな菊花石はめったにありません。

刀掛があります。これ又隠ですね。はい、長廊下。今言った菊花石で、ここが又隠の裏側ですね。また又隠が出てきましたけれども。こういうふうですね。要するに家元が70歳前の時はこういうふうにして洞庫に板をはめ殺しにします。これはですね、大水屋。大水屋の小壁の脇壁に13代円能斎が



寒雲亭



大水屋



竹花入

水屋の心得を板に書き記したものです。それから寒雲亭から見た露地ですね。これが小袖の手水鉢。寒雲亭という座敷は宗旦の時に出来てますが、これ8畳ですけれども、小間据えにしています。ここに向切の炉を切るようになっていいます。というのはここに付書院が

あって、先程見た水屋からの障子はこのところの障子ですね。天井は三段構成になっています。真行草の天井になっていると言われています。草庵茶室の天井構成を8畳の座敷に取り入れました。はい、台所。立派な台所でしょ。玄々斎の時に大增築して出



利休御祖堂

来た台所です。これは大水屋です。普請の最後に、大水屋の小壁の留竹の残りで以て玄々斎は花入を造ってですね、棟梁という銘を書き付けて木村清兵衛に贈っています。裏千家の代表的な大水屋です。これは稽古の10箇条というのが書いてありますね。これも玄々斎が書いたものを掛けてあります。

それから利休御祖堂です。流祖仙叟の時に造られました。天明の大火後は玄々斎が再興いたします。その時にこの加賀の風情でもって藁葺きの屋根にしたわけですね。円窓、先程の奥待合と似てますでしょう。奥待合を造る時に利休堂の雰囲気を取り入れています。ここが雪見窓ですね。そしてこれが蛤棚ですね。年の暮れに除夜釜と言ってですね、ふだん畳廊下で通る6畳の間・溜精軒を区切って逆勝手出炉の茶室にしつらえて除夜釜が掛かります。そして終わってからその種火を灰の中に埋めておきます。これを埋火(うずみび)といいます。午前4時ころ先程の梅の井の若水をお家元が汲んで去年の火を移して利休御祖堂でお茶を点てられると聞いております。そして家族、業躰、水屋詰め一同が咄々斎前の長廊下から大水屋までずっと並んで大服茶をいただくということです。

咄々斎という名前は宗旦の号なんですね。咄々斎。お家元がいつも稽古をみる道場ですね。『咄々 甲申春 晩翠』と額が掛かっています。甲申は明治17



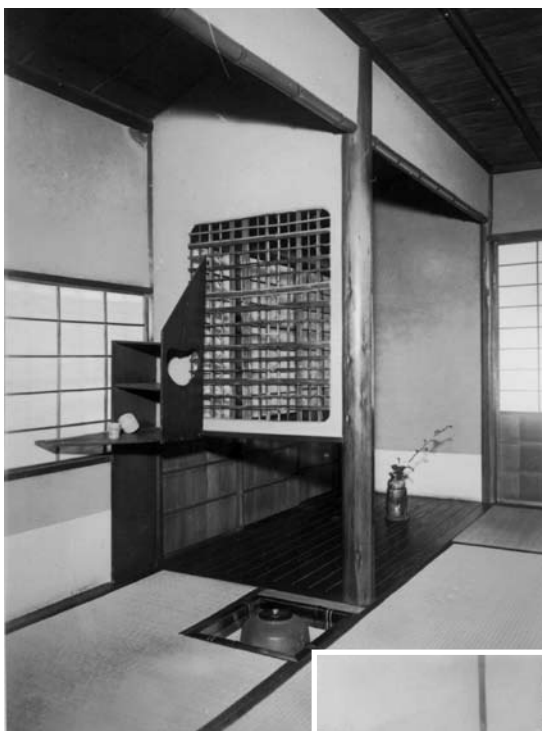
稽古の10箇条



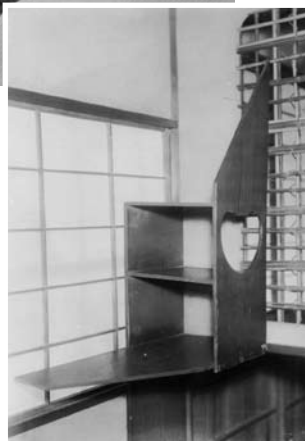


大炉から見た香狭間桐透し

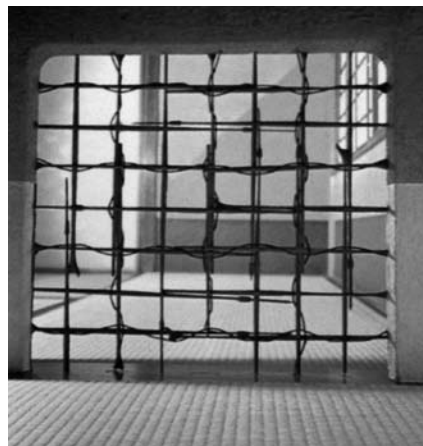
年です。晩翠は小松宮彰仁親王です。天井は一崩し天井、こういう天井ですね。それから先程言った反古襖というのはこれです。欄間が香狭間桐透しになっています。大炉の炉はここに切ってあって、この炉の暖かみを主室の咄々斎にとりこむということです。4本の反古襖を取り外すとき、この敷居は外



無色軒



釘箱棚



溜精軒の下地窓

して畳を詰めて奥に入れます。ですからこの鴨居は非常に太いでしょう。敷居は外せますから構造的にはここでしっかりした材を入れています。この襖を外して、この敷居もこちら側にするわけですね。咄々斎。正月の時に咄々斎の風情ですね。香狭間桐透しこれですね。長廊下。利休御祖堂。それからこれは無色軒の腰掛待合から見た感じですね。無色軒というのは「松無古今色」という名前から松色無しで無色軒という扁額が掛かっています。菊花石の手水鉢はここにありますがね。これですね。無色軒。はい、無色軒はこんなふうになっていまして、これが釘箱棚と言ってですね、仙叟の時に屋根師の釘箱をヒントにしてこれを造ったということです。炉は向切になっていますね。はい、こんなふうです。茶道口は幅の狭い襖ですが、大襖を入れて竹を立てて茶道口の反対側に板をはめ込んでいます。床の間がないので襖を貼り付けて壁床にしていますね。点前座との区切りに柱を立てて大きく下地窓をあけています。玄々斎は下地窓をいろいろ造っていますね。これは溜精軒ですね。溜精軒というのはふだんは通り道なんですけれども、除夜釜の時にはここに炉が切ってあって、こちらから入って逆勝手の席になりますね。溜精軒の下地窓は「杓の柄窓」といいます。玄々斎の好みで、柄杓は使ううちに、合が柄から外れてしまいます。捨てずに下地窓に柄を再利用したのです。また合は風炉の合を身に炉の合を蓋にして茶器を造っています。

これが抛筌斎。利休さんの号ですね。これ12畳の部屋で、この2畳だけが高麗縁になっています。玄々斎が、貴人様を招いて七事式を見学する時に貴人様が座れる場所にしました。上段を設けずに位の偉い人を招く事が出来るという部屋を造るわけです。正月の時にはここに道具飾りがしてありますね。

だいたい以上でスライドは終わらせていただきます。時間が11時50分までという事ですから、な

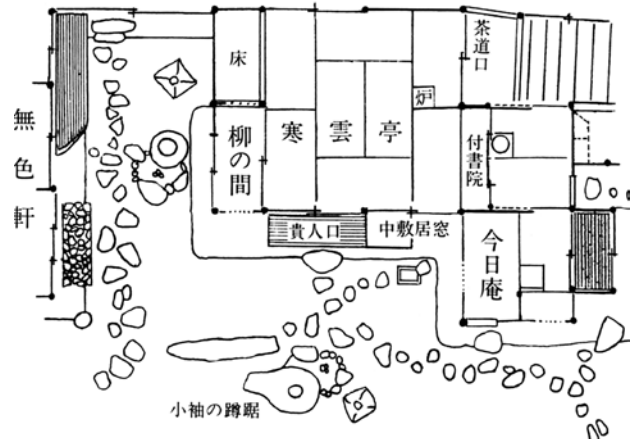


かなかお話尽くせませんが、来年のですね、それこそ岡崎の博物館、には玄々斎にちなむ道具が数多く出ますのでしっかりと見てもらえるといいと思います。

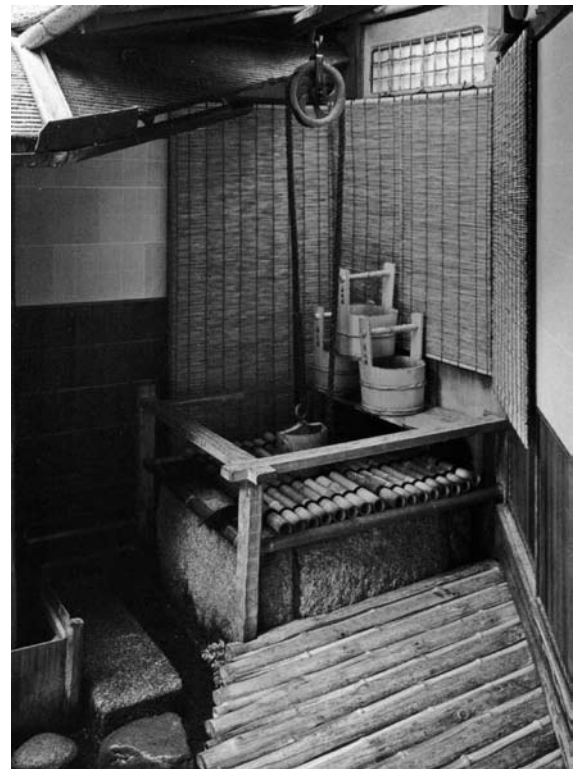
岡崎発茶道人ということで玄々斎の出自について、尾張徳川十二代藩主斉荘との出会い、利休居士250年忌について、利休御祖堂の再興をはじめとする裏千家建物の整備、法護普須磨の意味、禁中への献茶と和巾点復興、「茶道の源意」にみる茶の精神、立礼式の考案とお話させていただきました。

玄々斎が明治維新の激動を乗り越えて、それこそ近代の茶道というのを作り上げたとしたら、鵬雲斎大宗匠は、国連の親善大使としてグリーンのお茶の一碗でもって世界平和を目指して今世界中を駆け回ってみえます。「一碗からピースフルネスを」というターゲットの下に、大宗匠は亥年の生まれですから86歳かな。大活躍してみえます。鵬雲斎大宗匠はそれこそ玄々斎の生まれ変わりだと自負してみえます。まさに玄々斎が近代茶道の礎を築き、鵬雲斎玄室大宗匠が環境の緑に通じる茶の湯で世界平和を目指す姿は私にとっても玄々斎の再来と映ります。

特にこの三河の地は玄々斎の生誕の地ですので、ぜひお茶の文化が根付くことを、今も結構広がっていますがもっともっと広がることを期待して、終わりといたします。今日はどうもありがとうございました。



今日庵と寒雲亭の図



「梅の井」井戸



大台所



法護普須磨の襖

平成21年12月26日(土) 於コミュニティサテライトオフィス

「奥殿大給松平家出身・裏千家十一代玄々斎について」 人間環境大学教授 神谷昇司

### 玄々斎の出自

松平真次(さねつぐ)遠祖。徳川秀忠に仕え、慶長20年(1615)大坂の陣での戦功により、御徒頭となり、従五位下縫殿頭に任ぜられ、上野国に千石の領地を与えられる。寛永4年(1627)大番頭に進み、父祖の地加茂郡大給の地に3千石を賜り、さらに加茂郡足助と額田郡奥殿に7千石の知行を享けて、正保3年(1646)、70歳で没する。

大給松平家は、真次の領地の内4千石を継いだその子乗次(のりつぐ)を初代とする。

乗次は書院番頭、大坂定番などを勤め、額田郡内の4千石に加え、信濃国佐久郡内などに1万2千石を領す。その後乗真(のりざね)を養嗣子として迎え、元禄16年(1703)に大給三代を継いで縫殿頭となり、正徳元年(1711)に居所を大給から碧海郡奥殿村(現岡崎市)に移し、奥殿藩を誕生させて幕末まで、**盈乗**(みつのり)、**乗穩**(のりやす)、**乗友**(のりとも)、**乗尹**(のりただ)、**乗羨**(のりよし)、**乗利**(のりとし)、**乗謨**(のりかた)(恒)と代々奥殿に住むが、明治4年、乗謨の代に至って、信濃南佐久郡龍岡田ノ口城に移り後、伯爵となる。この田ノ口城は北海道の五陵廓と同じ建築法で、設計はフランス人だと伝える。

玄々斎の父大隅守**乗友**は、宝暦10年(1760)10月22日に江戸で生まれる。天明2年(1782)に大給六代目となり、初めは縫殿助を名乗り、襲封後に、従五位下兵部少輔に叙任、寛政元年(1789)に大隅守に改める。しかし在位9年の寛政2年、31歳の時致仕し、前年養子としていた弟の乗尹に譲る。乗友は隠居してから、文政7年(1824)に66歳で没するまでの間に大給松平家が裏千家十代認得斎との交友を培う基を築き、数寄者として過ごす。

乗友の末弟で奥殿の七代目を継いだ**乗尹**は、安永6年(1777)7月4日生。14歳の時、跡を継ぐ。その後三河と信濃の両国に1万6千石を領し従五位下対馬守に叙任し、2年後に主水正(もんどのかみ)と改める。乗尹が七代目を継いだ年に乗友に初めて男子が誕生。八代目の**乗羨**。10歳の時、乗尹の養子となり、3年後の享和2年(1802)に家督を継ぎ、従五位下縫殿頭になる。乗友は長子乗羨のあと、渡辺家へ養子にいった**規綱**(のりつな)、藤掛主水正永定の養子になった永増、裏千家の玄々斎を含め15人の子を儲ける。

兄の**乗羨**は大給八代目を襲封し、文政10年に38歳で没する。養父認得斎は文政9年8月24日に57歳で逝去。現在裏千家蔵認得斎手造の水指の箱書付によると文政2年に認得斎と乗羨の出会いがあり、裏千家茶道資料館副館長の筒井紘一氏は「養子縁組が成立した御礼に認得斎は二条城に在番中の乗羨を訪れた時のものでは」と指摘している。なお実父乗友は文政7年に没する。

玄々斎の次兄**規綱**は寛政4年(1792)生まれ、11歳のとき尾張徳川家の家老で寺部城主の渡辺家に養子で入り、文化元年(1804)十代目を襲い、半蔵規綱と称す。同5年8月江戸へ下り、初めて尾張十代藩主斉朝に拝謁し、つづいて十二代將軍家斉にも拝謁。文化14年10月、加判の職につくが、1年後の文政元年12月12日、突然加判の職を免ぜられて、27才で尾張へ戻る。その後42歳の天保4年(1833)に隠居し、6年には兵庫入道渡辺又日庵と称し、数寄者として風流生活に入る。

渡辺家と大給松平家との関係は深く、乗友の弟綱光も渡辺家の養子に入り、九代目当主となる。玄々斎はこの18歳年上の規綱に茶の湯手ほどきを受けており、徳川家三卿の一つ田安家への出入りや田安家から尾張徳川家十二代藩主となった徳川斉荘（なりたか）との出会いも又日庵規綱の介在が大きかったと思われる。

玄々斎の最初の好物と思われる角田川焼香合「都鳥」に「文政十亥年 於東都好茲」とあり、この年江戸へ出府している。また天保3年（1832）の好みに「富士絵蛤香合」がある。箱に「天保三辰年於東都 田安一位公より拝領ス 江の嶋蛤にて故有て好 帰京の土産数の内 精中（花押）」とある。江戸への出府は田安一位公（斉匡）の招きによる。

### 徳川斉荘（知止斎）と玄々斎

尾張徳川家十一代斉温（なりはる）十一代将軍家斉の第19子で、文政10年（1827）8月襲封、天保10年（1839）3月20日江戸市ヶ谷の藩邸で21年で逝去。十二代となった斉荘は、家斉の11子で、文化7年（1810）6月13日生まれ。4歳で御三卿である田安家三代斉匡（なりまさ）の養子となり、文政9年2月、17歳で養父斉匡の七女猶姫と結婚。天保7年8月、十万石の家督を譲られ、翌年権中納言となり、田安中納言と称す。斉温の逝去で、斉荘は、天保10年3月尾張徳川家61万9,500石の藩主となる。斉荘は、知止斎・金城山人と号し、最初のお国入りは天保11年2月4日から3月15日にかけての40日間でこの時に金鯢をはじめてまのあたりにして旦入に香合を50個造らせ、その一つに はじめての旅に鶴をおりたつを見て、

のどけしな けふを旅路のはじめにて 千とせの鶴に すはやちぎらむ  
名古屋の城にいたりて

かけ光るこがねの城は わが国に ありとききしも けふ見初めつる  
東に帰りて見わば 桜の花もさかりすぎたり

ふるさとの東に帰り来て見れば はなは尾張に思いまされり  
旅をせずば旅の思いをいかでしらん

すがのねのながき旅路のたのしさも 浮きも習いと 今ぞしりぬる とある。  
2度目のお国入りは天保14年6月25日より8ヶ月の逗留で、この時期多くの茶道具を好む。渡辺又日庵規綱と尾張家同朋で数寄屋組頭であった日比野林阿弥が大いに力を発揮。

林阿弥は名を長恭といい、茶名は宗永、号は知玄斎、孤莽と称す。茶室「孤莽」は玄々斎が好んだ席で明治44年神谷柏露軒に移築。

### 裏千家の茶室

利休二百五十年忌における裏千家の増築と数寄屋師清兵衛

玄々斎は天保11年（1840）利休二百五十年忌の法要と茶事のために大普請を行う。裏千家では利休百年忌を元禄3年（1690）四代仙叟宗室が、百五十年忌を元文5年（1740）八代又玄斎一燈が、二百年忌を寛政2年（1790）九代不見斎石翁が厳修する。寛政元年の前年、天明8年正月晦日に、京都に大火災があり、不見斎は寛政元年8月22日に又隠、今日庵、寒雲亭、無色軒の諸建築を整備し、9月27日より翌年の3月まで、遠忌追悼茶事が連日催される。



玄々斎の大普請は天保9年(1838)利休御祖堂の再建に始まり、ほぼ現在の間取りに大増築され、表千家と隔絶した体裁に整備される。翌10年4月15日に梅糸庵の上棟式が行われ、8月15日に一旦終えて9月8日の初会追悼茶事を迎える。

再建当時の表門は現在の兜門でなく、門南脇に門番所がある武家門であった。玄々斎は利休百回忌の折、仙叟が好んだ利休堂を再興して、不見斎時代に仮堂としての奥待合に納められていた利休木造を安置した。利休堂は九条尚忠の肝煎りもあり、再興された。9月8日の初会は近衛内大臣忠熙を迎え、濃茶席として荘付けをする。

この普請に携わったのは、初代木村清兵衛で、二百五十回忌が済むと更に改造、増築をする。稽古の間と称した8畳の間(咄々斎)、次の間6畳敷(大炉の間)それに付属する大水屋と抛筌斎12畳敷が改築されて「御数寄屋大工 木村清兵衛」の「御建絵図」(起し絵図)が伝わる。南側の濡縁が除かれて北側に付されているのと、大正14年(1925)に対流軒の増築で土蔵がなくなり咄々斎の入側が対流軒の入側に直結されたことのほか、現状は起こし絵図とほぼ合致している。

また表門は現在の兜門に改められる。これは大徳寺龍光院の兜門を模したもの。この門が出来上がった嘉永2年(1849)玄々斎40歳のときに、知恩院宮尊超法親王を、裏千家に迎える。知恩院宮はこの年2回お出ましがあり、2回目の11月6日の折、咄々斎・次の間6畳敷に大炉が切られる。厳寒の2月に、咄々斎の暖のため切られたという。又大炉の間の襖は玄々斎が初学の人のためにと、安政3年(1856)夏と奥書のあるもので四枚襖に、12段にわたって、茶道具や点前作法、利休道歌を掲げています。これを「法護普須磨」という。

法護普須磨は冊子本に版行され、玄々斎による裏千家茶道点前の整備とみる事ができる。

安政3年玄々斎は、自作の竹二重切花入を初代清兵衛に与える。その花入の箱に  
以稽古間水谷壁止りの残竹造之 二重花入 棟梁と号す今日庵 安政三辰冬

普請成就の時 與内匠清兵衛方 とある。また咄々斎の棟札に  
安政三丙辰年夏二十四日上棟一世玄々斎宗室 棟梁村清兵衛 同幸次郎 とある。

### 禁中献茶と「和巾点」の復興

東本願寺の門主に献茶を行った前年の万延元年(1860)12月20日、玄々斎は禁中への献茶の儀を旨とする口上書きを内裏へ提出。中院家の仲介によって慶応元年(1865)実現する。

右先例ヲ以献茶再興奉願候処、慶応元丑年六月、中院家ヲ  
以御聞濟被仰出候ニ付、則同年八朔ヨリ去ル巳年迄毎年春  
秋献上仕候左ノ通り

御濃茶 銘龍之影 木地中次二納メ一箱

御茶杓 白竹真削共 筒 宗室作一箱 とある。これを記念して玄々斎は和巾点を復興する。その披露が慶応2年正月19日抛筌斎で行われる。この会で使用した菓子菱花平とは現在まで家元初釜に限って用いられている花びら餅の原型。

### 「茶道の源意」と立礼式の考案

明治新政府は維新の10年間我が国の伝統文化をすべて捨て去り、茶の湯文化は単に技や術だ

けに重点をおく芸能とみられ、明治5年(1872)茶の湯の宗匠たちを遊芸人として「芸能鑑札」を付与すべしとしたとき、三千家を代表して63歳の最長老玄々斎は、京都府知事に「茶道の源意」と題し「口上書」を提出する。

茶道の源意は忠孝五常を精励し節儉質素を専らに守り分限相応たる家務に怠らず治世  
安穩の朝恩を奉戴し貴賤衆人親疎の隔て無交会し子孫長久無病延寿の天恵を仰ぐ斯業を教諭の  
道故に茶会の規矩嚴重礼節正敷五体を崩さず誠心を以執行成可事業也依て纔か薄茶一点中にも  
此意 趣悉皆顯然と表示畢

衣食住道具も露地も奢りなく 誠意を励む茶味の明くれ精中六十三ヶ年七ヶ月誌

さらに「乍恐奉願上口上書 右者茶道之意味奉懇願候」と添書きし、茶道は儒教の教えを基礎にして成立発展した精神文化であり、単なる遊芸ではないことを明らかにした。

この「茶道の源意」と添書きを、三千家連名で、時の京都府知事長谷信篤宛に差出し、その結果遊芸人という鑑札を持つことなく、従来する。それも書院座敷に据える意図のもとに考案。実際使用されたのは明治5年の京都内国博覧会において。会は3月10日より5月10日までの50日間で、京都御所の一部を借用して内外の人々を多数招いた産業博覧会。その主会場とは別に「附博覧」と称して祇園新小路南林下町で芸妓の手踊りの上演と建仁寺塔頭正伝院の織田有楽好みの茶席「如庵」の席を中心とする野点席と囲いの席での点前披露。茶席の担当は、三千家と藪内家が出仕。この野点席を玄々斎の提案で点茶盤による立礼式茶法で行う。京都博覧会はその後、年々盛んになるが、京の茶家が再度協賛したのは明治9年の第5回の会で、玄々斎にとっては最後の奉仕となる。玄々斎はこの茶会では、立礼式の茶法ではなく本来の濃茶、薄茶点前。玄々斎はこの翌年、明治10年7月11日に享年68歳で逝去。

## 裏千家図面

